

# なぞの盗難事件

# THE INCREDIBLE THEFT

1989年作品

製作:ブライアン・イーストマン 監督:エドワード・ベネット 脚色:デビッド・リード

日本語版プロデューサー:里口 千 日本語版演出:山田 悦司 日本語版翻訳:宇津木 道子

出演:

エルキュール・ポワロ … デビッド・スーシェ/熊倉 一雄  
ヘイスティンクス大尉 … ヒュー・フレイザー/富山 敬、安原 義人  
ジャップ主任警部 … フィリップ・ジャクソン/坂口 芳貞  
ミス・レモン … ポーリン・モラン/翠 準子  
※ ※ ※  
トミー・メイフィールド … ジョン・ストライド/宮川 洋一  
バンダリン夫人 … カルメン・ドウ・ソートイ/田島 令子  
レディー・メイフィールド … シアラン・マッデン/武藤 礼子  
サー・ジョージ・キャリントン … ジョン・カーソン/石田 太郎  
レディー・キャリントン … フィリダ・ロウ/谷 育子



©ITV Studios Limited 1989

匿名の依頼主に呼び出されたポワロ。電話の主は新型戦闘機を開発している実業家メイフィールドの夫人で、夫がドイツのスパイだという噂のある夫人を週末、家に招いたことを心配してポワロに助けを求めてきたのだ。政府要人サー・ジョージ・キャリントンやメイフィールド、そしてポワロが警戒する中、書斎から開発中の戦闘機の設計図の重要なページが盗まれる。誰もが夫人を疑うが、ポワロは単純な事件ではないと推理していた。

## ◆ミステリのアクション

本話におけるミステリの妙味は、巧緻なトリックでなく、諸人物のフェイクなキャラクターと行動、その必然性を構築した真相の構図でしょう。しかしドラマとしての見せ場はむしろ、冒頭の戦闘機と、ヤマ場でのカー・アクション。特に、戦闘機によるデモンストレーションの迫力に目を見張られた方も多いのでは。こうしたガジェットを使ったシーン、特に時代を感じさせるアクションに存外な力を注いでいるのも、このシリーズの特色です。

## ◆ポワロとペンギン

これまではまだそれほど目につかないかもしれませんが、少々オーバーな会釈や、小刻みなストライドで歩く姿が、ポワロ独特の所作として主演デビッド・スーシェにより見事に視覚化されており、回を重ねる毎にこのイメージは明確になっていきます。

本話でミス・スミス?の呼び出しに応じてロンドン動物園のペンギン・プール前で待つポワロが、その場の住民を無然として眺めるこのシーン。小太り体型、黒ジャケットに白腹を思わせるウェストコート、ちょこちょこ歩く姿を彼らになぞらえた皮肉とも採れます。回が深まりポワロの姿に愛着を感じた際には、是非このシーンを振り返ってユーモアのご検証を。

## ◆プロフィール:エルキュール・ポワロ[2]

それでは少しまとめて、ポワロの身体的・性格的な特徴をご紹介します。小柄な背丈に小太りの体躯。手入れを欠かさぬ口髭は英国一を自認。カラーと蝶タイ、磨き込まれたエナメル靴、黒かグレーのスーツまたはスリーピース着用が基本。温暖な地へ赴いた際は白地も着ますが、少しでも寒ければ分厚いコートにマフラーで身をくるみます。

趣味はガーデニング。美食家で、特にフランス料理を好み、英国式朝食とフィッシュ&チップスを除きイギリス料理は眼中になし。たしなみは適度な喫煙と、お茶はハーブティーの一種であるティザンもしくはココア、酒はワインか甘いリキュール。甘味に目がなく、お茶には砂糖を最低三杯入れ、食後のデザートは大いなる楽しみです。

ベルギー風とフランス風の間のアクセントで話す言葉にはしばしば仏単語が交じり、英語による比喩等では時に間違いや不慣れな表現を挟みます。口癖は仏語の挨拶や感嘆詞の他、“行動よりも思考による解決が誇り”を象徴する「灰色の脳細胞」、折々の問い掛けに“今は保証できないが肯定的”というニュアンスで応える「たぶん」等が挙げられます。